

# SHOW HEY シネマルーム

★★★

## 王朝の陰謀 闇の四天王と黄金のドラゴン (狄仁杰之四大天王/Detective Dee: The Four Heavenly Kings)

2018年/中国映画  
配給: ツイン/132分

2019 (平成31) 年2月3日鑑賞

シネマート心齋橋

### Data

監督・脚本: ツイ・ハーク (徐克)  
出演: マーク・チャオ/ウィリアム・フォン・ケニー・リン/  
カーリーナ・ラウ/イーサン・ルアン/マー・スーチュン

## ■ショートコメント■

◆徐克 (ツイ・ハーク) 監督の『判事ディー』シリーズ第1作『王朝の陰謀 判事ディーと人体発火怪奇事件』(10年) はメチャ面白いエンタメ作で、私は「徐克 (ツイ・ハーク) 監督が描く世界は今や張芸謀 (チャン・イーモウ) 以上、またはスピルバーグ以上！」と評価し、星5つをつけた (『シネマ34』167頁)。その第2作は見逃したが、最新の第3作は必見！とばかりに料金を払って映画館へ赴くことに。

◆私は現実味の薄いワイヤーアクションはあまり好きではないが、ツイ・ハーク作品だけは別。ツイ・ハーク監督からワイヤーアクションを取ったら何も残らないほど、彼の映画では良くも悪くもそれが売りだ。また、CG撮影ももう1つの売りだから、スクリーン上はとにかく何でもあり！そこに、唐の時代に実題したという中国版シャーロック・ホームズこと「判事ディー」が登場し、王朝に渦巻く陰謀の謎解き (= 犯人捜し、犯人退治) で大活躍するのだから面白いはずだ。

◆『判事ディー』シリーズでは、カーリーナ・ラウ扮する皇后則天武后が、王朝の陰謀のキーウーマンになる。そもそも、ディーに「特命判事」の称号を与えたのが則天武后だ。もっとも、シリーズ第1作から何事にも疑い深くかつ何事にも心許さないのが則天武后のキャラだから、彼女は一方でディーに人体発火怪奇事件の解明についての全権を与えながら、他方ではお目付役を任命していたから、女心は複雑だ。それと同じように、本作でも皇帝がディー (マーク・チャオ) に対して最強の神剣「降龍杖」を授けたことに則天武后は不満たらたら。そこで、彼女は司法長官のユーチ (ウィリアム・フォン) に「降龍杖」を奪い返すよう命令したところから、物語がスタートする。さあ、今回も面白そう。そう思っ

たが・・・。

◆シリーズ第1作は「人体発火怪奇事件」だったが、第3作は「闇の四天王と黄金のドラゴン」。そんな本作の不満の1つは、闇の四天王の1人として登場する女剣士・水月（マー・スーチュン）があまり美人ではないこと。第1作のお目付役で女剣士役を演じたのは美人女優リー・ビンビンだったから、それに比べると美人度がイマイチなのは仕方ないが・・・。不満の第2は、本作中盤から登場する“封魔族”という妖術使いや三蔵法師の弟子ユエンツォー大師（イーサン・ルアン）の分身(?)たちの姿があまりに子供っぽいこと。「黄金のドラゴン」が暴れ回る風景は想定内だし、いかにも中華風でいいのだが、功績が正当に評価されなかったばかりか、逆に顔に入れ墨を施された恨みで唐帝国の転覆を企てる“封魔族”の暴れっぷりはさすがにノーサンキュー。そのため、本来手に汗握るはずのクライマックスのワイヤーアクションがかなり馬鹿馬鹿しく思えてくることに・・・。

◆シリーズ第1作から、皇帝は則天武後の“暴走”に困り気味だったが、それは本作でも同じ。しかし、そのため妻に愛想を尽かしているかというところではなく、判事ディーやユエンツォー大師の献身的な働きによって封魔族の襲撃を撃退すると、一時的に避難していた則天武后と共に仲良く宮廷に戻ることに。これにて皇帝と皇后は2人仲良く暮らしましたとさ、となると思ったが、それはとりあえず本作だけらしい。

さあ、唐帝国の時代はこのまま安泰を保つの・・・?ひょっとして、そこにまた一波乱あれば、それはシリーズ第4作で描かれるのかも・・・。

2019（平成31）年2月5日記